
デジタルモンスターズ ～選ばれし戦士達 GENERATION～

郡司侑輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジタルモンスターズ ～選ばれし戦士達 GENERATIO
N～

【Nコード】

N0598X

【作者名】

郡司侑輝

【あらすじ】

専門学校に向けて努力する八神優斗は、突然現れたデビモンによって、目茶苦茶に……そして、優斗はティマーになるのだった！！

一話（前書き）

アグモン「前書き劇場！」

優斗「つか、アグモンそれ作者のスピノフのネタだって！」

アグモン「今回から始まる【デジタルモンスターズ ～選ばれし戦士達 GENERATION～】の主人公デジモンのアグモンだっぜ！」

優斗「俺は八神優斗。言つとくけど、太一の方じゃ無いからな。これだけは言っておく！これから始まるのは、俺の不幸の始まりだ！」

優斗のイメージは

D o g D a y s のシンク顔で刹那口調です。

一話

普通の高校三年生の八神優斗やがみ ゆうとは、高校生活三度目の夏休みを専門学校進学にむけ、願書作成に性を出していた。学校での問題も無いことから、推薦は間違いないと担任の松浦正治まつうら せいぢが言っていた。

優斗「急げ急げ！」

因みに、夏休みの課題も半分しか終えてない。
そんな8月25日だった。

新学期。徹夜で課題を終えた優斗は、目の下の隈を気にせず登校していた。

特に学力は優秀でも無いし馬鹿でも無い。成績はいつも中の上辺り。帰宅部。

そんな彼の教室には、変わった人間しかない。

千代里「ちよりーっす優斗！」

クラスで一番チャライ女子の飯田千代里いいだ ちより。何でもかんでもチャライ。

番著「おはようでごわす優斗」

クラスの番長で男子の合田番著いっただばんぢ。義理堅く、仲間思いな番長である。

小松「優斗殿、おはようで御座る。某、今朝は犬の——」

クラスで一番侍気質で女子の大松小松^{おおまつ こまつ}。因みに、若干ではあるが、優斗のストーカーである。

以上の三人を代表するように、優斗のクラスは優斗以外個性的な人物ばかりで、優斗は普通過ぎるのだ。

優斗「うん、千代里、番著、小松おはよう」

そのクラスの中で、優斗と中がいいのは千代里達三人のみ。

ただ、優斗は知らなかった。これから起きる事件は、知る由も無い。

長たらしい校長の始業式の挨拶。残暑が厳しい上に空調が壊れている体育館は既に蒸し風呂と化していた。優斗は気を紛らわせようと視線を外に走らせる。

その視線の先には上空に何かの影があった。だが優斗はそれを幻覚と思い、気にもせず視線をタヌキ親父（校長）に戻す。

戻して数分が経ち、やっと閉会の言葉。集会委員長がマイクの前に立つ。その時だ。グランド側の窓ガラスが一斉に粉に砕け、黒い体とボロボロな翼の生命体が空中で見下ろしていた。

優斗はその生命体を見たことがある。それは、小さい頃から大好きなデジタルモンスター縮めてデジモンに登場するデジモンの、デビモンだった。

デビモンの登場で、生徒も先生も慌て、恐怖し、中には失禁に気絶と症状は様々だった。だが、優斗だけは恐れなかった。

デビモン「時は来た。^{リアルワールド}現実世界とデジタルワールドの融合の時が。貴様等はその礎^{いしずえ}となるのだ。光栄に思うがいい！ー」

優斗「んな事したら、……崩壊しか無いぞ!!」

デビモン「ん? 恐れぬニンゲンが居たとは……。ならば貴様には教えてやるう。確かに、その終わりには破滅しかないが、新たに新世界を作る事が出来るんだよ」

優斗「んなっ……」

デビモン「では死ね」

優斗に至近距離に迫ったデビモンは鋭い爪で腹部を刺そうとした。が、それは新たに現れた黄色い小さなトカゲのような生物が止めた。この生物は、デビモンと同じくデジモンで優斗が一番好きなデジモンの……

優斗「アグモン!？」

アグモン「オレの兄貴^{テイマー}に手を出すな!!」

アグモンがデビモンを押し飛ばすと同時に、優斗の手にテレビアニメ【デジモンセイバーズ】に登場するデジヴァイスバーストのシャインオレンジカラーが現れる。

デビモンVSアグモン&優斗。この図式は、周囲の人物から見れば、マンガやゲームの出来事が実写どころか現実になったと思うだろう。

デビモン「くっ……まあいい。こっちはまだ死ねないんでね。来いパロットモン」

デビモンが言うと、その背後にオウムに似たパロットモンが空から

姿を現す。呼び出したデビモンは何処かへと飛び去る。

アグモン「兄貴、指示を出して早く!!」

優斗は多少困惑するが、デジヴァイスを握り、アグモンに指示を出す。

優斗「アグモンは出来るだけ、皆を守って!!」

アグモン「オッケー!!」

アグモンがパロットモンに果敢に戦う隙に、他の生徒は避難する。そして、今の優斗に関わりたくない教師達も避難する。

アグモン「ベビーフレイム!!」

アグモンの放つベビーフレイムがパロットモンの胴体を焦がし、一旦パロットモンは距離を取った。

その時、優斗のデジヴァイスが光を増し、画面に文字が並ぶ。

<DIGISEOUL CHARGE>

デジモンセイバースを欠かさず視聴していた優斗は、デジヴァイスの上部に手を翳し、叫んだ。

優斗「デジソウル……チャージ!!」

デジヴァイスから放たれる光が、アグモンを包みパロットモンの目が眩む。そして、アグモンは進化を遂げる。

アグモン「アグモン進化あ！！」

アグモンの四肢が、胴が、そして頭部が巨大化しその姿を曝す。

グレイモン「グレイモン！！」

先程まで129cm程だったアグモンが、およそ5mのグレイモンに進化する。

同じ大きさとなったグレイモンはパロットモンを外に投げ出し、優斗も後を追う。が、千代里が優斗の夏服の袖を引く。番著も小松も。

優斗「千代里……番著に小松……」

千代里「何危ない事に首突っ込む訳？まぢ意味わかんないんだけど！！」

番著「優斗、おいどん等は優斗に死んで欲しくないでござす！！」

小松「某も！」

他の生徒職員は皆避難をしていると言うのに、この三人は優斗が心配でならない様子だ。だが優斗は裾を掴んでいる千代里の優しく払いのけ、言った。

優斗「今俺がやらなきゃ、一体誰がやるんだ？俺がやらなきゃなんない事は、変わりもしないからさ。だから行くよ。グレイモンと共に……」

そう言った優斗はグレイモンを追った。

グラウンドに倒れているグレイモンを見た優斗は駆け寄り、声をかけ

た。

優斗「グレイモン！しっかりしろ、大丈夫か？！」

グレイモン「兄貴、大丈夫だ。心配かけてすまん！俺にデジソウルを！！」

優斗「ああ。ありったけくれてやるよ」

グレイモン「程々に頼む」

優斗「っけー。デジソウル…チャージ！！」

優斗の手の平のデジソウルをデジヴァイスバーストが読み取り、それを具現化する。

大きく口を開けたグレイモン。その口に火球が集まり、肥大していく。それが頂点に達し、放った。

グレイモン「メガフレEEEEEEEEEEEEイム！！！」

勢いよく放たれたメガフレイムはパロットモンに向かう。

パロットモンは避ける事が出来ずにメガフレイムに当たり、予想を超えるダメージを受けた結果、デジタマに戻り何処かへ飛び去った。

優斗「……………という訳なんだ」

優斗は家に帰って早々母と妹に学校での出来事を話した。

あの後学校は直ぐに下校となった。デビモンにパロットモンの襲撃があれば理由としては簡単だ。それに優斗にアグモンがパートナーデジモンとなったので、優斗が引き取る以外他はない。千代里達は今まで通り優斗と接している。
やがみこと
すると、優斗の母である八神詔は優斗とアグモンを交互に見遣り、喋る。

詔「まあまあ大変。ご飯足りるかしら？」

ずこっ！

優斗「何言っとなじやおかん!!」

詔の振る舞いに優斗と妹の八神波奈はやがみ はなずっこけ、優斗はそんな母に突っ込んだ。

波奈「にーにー、お母さんの天然ボケは今に始まった事じゃないよ」

優斗「いやだけどさあ!!」

アグモン「兄貴、オレ腹減った……」

詔「あらあら、そろそろお昼ご飯だからアグちゃんもおあがり」

アグモン「いやったー!!」

優斗「いや、なんでやねええええええん!!!!!!」

波奈「にーにーうるさい」

翌日。八神家の玄関前に数人の黒服の男が優斗とアグモンを尋ねに黒塗りのベンツで訪問してきた。庭の草むしりを行っていた優斗と見学の波奈とアグモンの視線に映るベンツの後部座席からは母とそんなに歳も違わない真っ黒なスーツを着た女性が降りて優斗に近づく。

「八神優斗君……………ですね？」

優斗「ええ、そうですが」

すると女性は名刺を取り出し優斗に手渡した。そこにはこう書かれてあった。

優斗「超常現象特捜本部本部長 桐山麗子^{きりやま れいこ}……………あの、超常現象特捜本部って何ですか？」

優斗に質問された麗子はアグモンの目線と同じ高さまでしゃがみ込み、言った。

麗子「私達はこの世界に起こった異常現象を捜査している組織なの。実はデジタルワールドと人間世界^{人間}が融合してしまっ……………そういう結果が出たの。それをデビモンが貴方の通う高等学校に現れ、アグモンも貴方の前に現れた。違つかしら？」

当たっている。優斗は頬に一筋の冷や汗を流す。

優斗「はい」

麗子「そう…でもね、貴方以外にもティマーが誕生したのよ」

優斗「俺以外にもですか？」

まさか自分以外にもティマーになった人間が居たとは思ひもしなかった。同じくアグモンも驚いていた。恐らくは優斗と同じ理由だろう。そんな時、玄関から詔が扉を開け麗子を見ると旧友を見るような目で嬉々として麗子に歩み寄り喋った。

詔「あらー、久しぶりねえ、桐山ちゃん。何年振りだったかしらねえ」

麗子「詔…先輩?!」

どうやら詔と麗子は旧知の仲で先輩後輩の関係の様だ。詔の登場で少しでも緊迫していた空気が一瞬にして破壊された。

波奈「にーにー、お母さんって空気壊しの達人だね」

優斗「ま、それが母さんだし」

アグモン「詔凄い」

その後、どうにか詔を撒いた麗子はベントツに優斗とアグモンを乗せとある場所へと向かった。

道中ベントツの中で麗子は懐からカードリーダータイプのデジヴァイスのD-アークを取り出す。それを見た優斗は驚愕し、麗子に質問する。

優斗「貴女も、ティマーなんですか？」

麗子「ええ。この色から見れば解るでしょ、私のパートナーデジモンが」

色はまさに赤の縁取りがあることからパートナーはギルモンだろう。ギルモンと言えば、ウィルス種のデジモン。進化すればグラウモン、超進化すればメガログラウモンに。ただし、メガログラウモンの時点で暗黒進化すればメギドラモンに進化すれば手の付けようが無い。だが、その反対も有り得る訳で、ロイヤルナイツの一員でもあるデュークモンに進化出来る。まさに末恐ろしいデジモンだ。

一方の麗子のデジヴァイスでもあるD・アークはデジモンカードを^{スラッシュ}読み込むすることにより、そのカードの効果がデジモンに表れるという代物だ。

麗子「言っとくけど、これから行くところは貴方の卒業後の就職先よ」

優斗「え、俺進学希望なんですけど……」

麗子「あ、その点は大丈夫。貴方の進学先と高校にちよちよと交渉して貴方を就職者として迎えるわ」

優斗「はっ!？」

すると、麗子は優斗にパンフレットを差し出した。

麗子「ようこそ”超常現象特捜本部”通称”^{バスタード}PSLD”へ」

優斗「……………」

アグモン「兄貴が固まってる!？」

”PSLD”に到着するまで、優斗は固まっていた。当然だ、進学に向けた努力が目の前で水の泡と化したのだから。

「ワシが”PSLD”の長官の東聡獣郎である!！」
あすなろじゅうろう

優斗に面向かって叫んだハゲ頭の初老の男は”PSLD”の設立者にして”PSLD”の頂点の地位に立つ東聡獣郎。今二人がいるのはその長官室である。

聡獣郎の後ろには究極体のバンチョーレオモンが腕組みで立っていた。そのバンチョーレオモンは2m程の巨漢で勇ましいというのが、優斗とアグモンから見た第一印象である。

聡獣郎「それでは、この書類にサインを。言って置くが、別にこの組織の存在をばらしても、何にもならない事を覚えていて欲しい」

優斗「ここまで着たら腹括ります」

優斗はもう諦めきっているのか、書類に自分の名前を記載する。名前以外に書く必要な箇所は無かった。ただ、これだけは書かれてあった。

優斗「（”PSLD”に参加することを誓い、私は署名致します…
…か）」

聡獣郎「うむ。名前を書いたな、いや結構結構」

バンチョーレオモン「これで君は正式に”PSLD”の一員だ。実はこの組織では、任務には二人一組で行動するようになっていて。チームメイトそこで君に仲間を紹介しよう。何緊張する事はない。君と同期だから安心なさい」

バンチョーレオモンが言うと、長官室の扉が開く。入って来たのは青い毛皮と黄色い角が特徴のデジモンのガブモンを連れた少女だった。年は優斗と同じ年でそれも優斗の見覚えのある人物だった。

バンチョーレオモン「紹介しよう。彼女は――」

優斗「ナナ!？」

ナナ「優斗……?!」

バンチョーレオモン「おや?二人は知り合いだったのか。武之内ナナ君は君と同じ日にテイマーになりパートナーは見ての通りガブモンだ」

ガブモン「……」

アグモン「お前、何でだんまりこくってんだ?」

ガブモン「……黙れ」

アグモン「なんだとー!」

麗子「あの二人で、本当にいいのかしら？特にアグモンにガブモン」

麗子は誰もいない部屋に居た。彼女の目の前には長官室の映像がモニターに映っていた。

彼女は先程言った事を自分のパートナーデジモンに喋った。

デュークモン「さあな。だが、デビモンの言ってる事も気になる。早く手を打っておかねば……」

ロイヤルナイツの一員のデュークモンは麗子に言い、頭を抱えていた。

危機は、これから迫って来るのだった。それは優斗もナナも誰にも分からない。分かるはずも無い。

続く

一話（後書き）

次回

蒼狼

二話（前書き）

ガブモン「前書き劇場」

ナナ「ガブちゃん何やってるの？」

ガブモン「お嬢様、これは礼儀の一つなので」

ナナ「へえー…。今回はアグちゃんとガブちゃんが完結…」

ガブモン「お嬢様、そこでストップ！……前回は主人公八神優斗は不運が重なり進学から就職へと変わってしまった高校三年生がそのきっかけとも言える出来事に遇うのだった」

ナナはネプギアと同じ顔と声で御想像下さい

そんでもって二話 蒼狼

二話

バンチヨーレオモンの紹介で再開した武之内ナナは八神優斗の幼なじみであった。その幼なじみのパートナーデジモンのガブモンは優斗のパートナーデジモンであるアグモンとは反りが合わない様だ。今優斗はナナと一緒に”PSLD”の休憩室におり、向かい合わせて座って居た。アグモンとガブモンはお互い顔を見ないようにしている。

優斗「でも、驚きだよな」

開口一番、優斗は開けた缶コーヒーを一口飲み言った。

ナナ「どうして？」

優斗の発言に首を傾げるナナはその意図が分からない様だ。

優斗「いきなりデジタルワールドと現実世界が融合するということんでもない事が起きるとデビモンは言うし、死にそうになった時にはアグモンが現れて助けてくれたし」

アグモン「あんな卑劣な奴は大っ嫌いだ！兄貴を殺そうとするんだからな」

ガブモン「……ふっ」

アグモン「あ、てめ笑ったな！？」

ガブモン「聞けばパロットモンに苦戦したそうじゃないか。僕のおイマイマ

嬢様は僕を強くしてくれるから、君より数倍早く究極体になれる」

アグモン「何をおおお!!!!」

優斗「アグモン！」

ナナ「ガブちゃん！」

アグモンとガブモンを止めようとする優斗とナナだが、二匹は聞かずますます険悪ムードを出すばかりだ。

そういえばと優斗は先程から気になった事をナナに聞いた。

優斗「そういえば、ナナのところには何が出たんだ？こっちは聞いての通りデビモンが現れてパロットモンと戦ったんだけど……そっちは？」

ナナ「こっちはヴァンデモンが。戦ったのはクワガモンよ。ねっ、デジヴァイス見せて。麗子さんが言うにはデジヴァイスにはケータイと同じ機能が付いてるのよ」

優斗「それは助かるなあ。俺ケータイ持ったこと無いし」

ナナが取り出したデジヴァイスは優斗と同じタイプのデジヴァイスバーストだが色はミラージユブルー。

しかし、ここで優斗には幾つかの疑問が残る。自分達のデジヴァイスではアグモンはジオグレイモンに進化するはずで、ミラージユブルーのデジヴァイスの場合はガブモンではなくガオモンになるはずである。

そんな優斗の引っ掛かりもいざ知らず、アグモンは優斗の手を、ガブモンはナナの手を引っ張り訓練ルームへ模擬戦をしに引っ張った。

訓練ルームに着いた二組は、それぞれ位置につき模擬戦を開始する。

麗子「いい、よく聞いて。これはあくまで模擬戦であって、デジタマに戻したら駄目よ」

デュークモン「勝負が付くまででいいので、思う存分戦え」

優斗とナナの上司に当たる麗子とそのパートナーデジモンでありロイヤルナイツの一員でもあるデュークモンが審判をするようだ。

アグモンとガブモンはどちらも戦闘準備万端だった。優斗とナナは既に腹はくくったのか、デジヴァイスを握る力を強める。

優斗「行くぞ！アグモン、攻撃開始！」

アグモン「ベビーバーナー！」

ナナ「ガブちゃん避けて！！」

ガブモン「はいお嬢様」

アグモンのベビーバーナーを上手く避けたガブモンは素早くアグモンの背後に移動し攻撃する。

ガブモン「ビーストアタック！」

アグモン「いっでー！このっ、ベビーフレイム！」

ガブモン「ぐっ！」

ビーストアタックを繰り出したガブモンは、アグモンに腕を捕まれ至近距離からのベビーフレームを受けた。

アグモン「どんなモンだ！」

ガブモン「くっ、僕は負けたくない！」

アグモン「オレもだ！」

二匹の距離が一気に縮まるというその時だった。

聡獣郎<ワシが”PSLD”の長官の東聡獣郎である！！南が丘中学校にて、メラモンとウッドモンが出現！ティマーは直ちに急行せよ！！！>

デジモンが現れ中学校を襲撃するというので対処せよとの長官からの放送命令が下り、勝負は一時的に中断という形となった。

麗子「二人とも南が丘中学校へ直ちに急行。二人ともバイクの免許は？」

優斗「あります」

ナナ「私も」

麗子「ならサイドカー付きをあなたたちに至急します。それで急行してちょうだい」

優斗「わかりました。行くぞナナ！それとアグモンにガブモン」

優斗に呼ばれ後を追うナナとアグモンとガブモンは通路を走る。
そんななかナナは優斗に声をかける。

ナナ「ねえ、南が丘中学校ってもしかして……」

優斗「俺達の母校だ。あそこには、波奈がいる！」

波奈の脳裏には何故こんな事になったのだろうかとしか浮かんでこなかった。

突如として現れ、校庭で暴れている二匹のデジモン。一体は体中炎だけのデジモン。もう一体は樹の幹の体をしたデジモンだ。

メラモン「貴様あ、リアルワールド現実世界に来てまで私をデジタマに戻そうとしたいのか?!」

ウッドモン「何を言うメラモン！貴様こそでは無いのかそれは！」

何やら口喧嘩をしていた二匹のデジモンに襲われている南が丘中学校の敷地は四割近くがボロボロだった。

波奈はこの日の昼から部活だったので学校に来ていたのだが、メラモンとウッドモンが現れたため部活は中止。そして波奈以外は逃げ延び、波奈は逃げ損ねたのであった。

そして腰が引けて動けなくなった波奈の頭上に向かって瓦礫が落ちてきた。

波奈「ッ……助けて、にーにー!!」

「ベビーフレイム!」

刹那、波奈に落ちそうになった瓦礫は突然軌道を変え、別の場所に落ちる。放ったのはアグモンだというのがわかる。そして…

優斗「波奈!」

波奈「にーにー…」

優斗「ここは危険だから逃げろ! ナナ、波奈を安全な場所に」

ナナ「わかった」

波奈「ナナ……さん?」

ナナ「久しぶり、波奈ちゃん。さてと、行くわよガブちゃん!」

ガブモン「はいお嬢様!」

優斗「こつちも行くぞ、アグモン!」

アグモン「合点だ!」

<<DIGISEOUL CHARGE>>

優斗& amp・ナナ「デジソウル、チャージ!」

アグモン「アグモン進化！」

ガブモン「ガブモン進化！」

アグモンの体が肥大すると共にガブモンの姿も変わり、四足歩行の形になり蒼き狼と進化する。

アグモンはグレイモンに進化し、ガブモンも同じく進化を遂げた。

グレイモン「グレイモン！」

ガルルモン「ガルルモン！」

グレイモンはウッドモンに、ガルルモンはメラモンに攻撃を開始する。グレイモンの突進がウッドモンに当たり、ガルルモンの鋭い爪がメラモンの脇腹を切り裂く。

優斗「ナイス、グレイモン！」

ナナ「優斗！」

波奈の避難を終えたナナが、グレイモンを讃える優斗に近付く。二人は顔を見合わせ、それぞれのデジヴァイスを高く掲げ指示を出した。

優斗「トドメだ、グレイモン！」

ナナ「いつて、ガルちゃん！」

グレイモン「メガフレエエイムー！」

ガルルモン「フリーズファンゲツ!!」

轟く火球と凍てつく牙が、ウッドモンとメラモンに直撃。デジタマがその場を去るかのように、空へ飛んで行った。どうやら先頭は終わりの様だ。

だが、優斗とガルルモンは違和感を抱いていた。

優斗「何か……おかしいぞ」

ガルルモン「まだ終わってない様な気が……」

アグモンとナナは怪訝そうな顔で優斗とガルルモンの顔を覗いていた。

何か足りない。その何かが優斗とガルルモンの脳裏にちらつき、思いつく出そう何なのだろうと考えれば考えるほどこんがらがる。そして、その原因がようやく分かった。

「ウッドモン!超進化あ!!」

煙りの中から声がしたと思うと、その煙りの中から樹の蔓がナナを目掛け勢いよく迫る。

優斗「ナナ!」

ガルルモン「フリーズファンゲ!」

優斗がナナを抱いて回避し、ガルルモンがその樹の蔓をフリーズファンゲで防ぐ。

ガルルモン「まさかとは思ってはいたけど……」

優斗「お前、メラモンを盾にしたのか!？」

煙りが晴れ、その本人が姿を現す。樹の幹の姿は肥大し、巨大な樹木と化していた。その幹には、赤黒く濁った瞳が輝いていた。

そのデジモンはもはや、ウッドモンとは言えなかった。樹木の形をしたデジモン……それは……

ジュレイモン「ジュレイモン!」

完全体のジュレイモンだった。

グレイモンは以前パロットモンと戦い勝利した。その自信が、完全体を倒せるという過信が、今のグレイモンの中で燃えたぎっていた。対するガルルモンはあくまで冷静に何をどうすればいいか考えていた。成熟期二匹と完全体一匹は果たして対等になるのかどうかを。

優斗「おいおい……あいつ……ホントは暗黒進化したんじゃないのか?」

ガルルモン「いや、有り得ないよ。これはあくまで僕の推論だけど、メラモンのデジコードを少しばかり頂戴しているみたいだ。外見上違いは無いけど、強さだったら……」

グレイモン「何へこたれてんだよ、馬鹿犬!」

ガルルモンの推論にグレイモンはガルルモンに強く言い放つ。ガルルモンは自分を犬呼ばわりした事と自分の推論を馬鹿にされた事でグレイモンに言い返す。

ガルルモン「犬言つな!さっきも行ったけど、あいつは恐らくメラ

モンの……」

グレイモン「ンなもん、真つ向からぶつ壊すんだ！お前が弱気になる所をテイマーに、相棒に見られたいのか？！違うだろ！出来ないんじゃない、やるんだ！お前、意外と頭でっかちナンだな」

ナナ「ガルちゃん。私のデジソウルを使って勝ってね」

優斗「……とゆー訳で。グレイモン！俺のデジソウルをおもいつきり使えー！！」

その時、二人のデジヴァイスの画面に、新たなコードが流れ出す。

<DIGISEOUL FULLCHARGE>

優斗「デジソウル、フルチャージー！！」

ナナ「デジソウル、フル…チャージー！！」

グレイモン「グレイモン！超進化ああー！！」

優斗のデジヴァイスから流れるデジソウルをグレイモンが浴び、その頭部と左腕と胸と背中に新たな部位が生まれ、グレイモンは更なる進化を遂げた。

メタルグレイモン「メタルグレイモンー！！」

完全体を遂げた、メタルグレイモン！

ガルルモン「ガルルモン！超進化ああー！！」

ナナのデジヴァイスからほとばしるデジソウルはガルルモンを包むと、四足から二足歩行と足腰が強化され、メリケンサックがその手に装備される。

ワーガルルモン「ワーガルルモン！！」

完全体のワーガルルモン！

新たな獲物を見つけたジュレイモンはメタルグレイモンとワーガルルモンに鳶の鞭を繰り出すが、メタルグレイモンは飛び、ガルルモンは素早い身のこなしで避ける。

獲物を仕留める事が出来ない。ジュレイモンは自らを怒り歎く。

ジュレイモン「がああああああ！！！！！！」

仕留めない苛立ちを周囲にぶつけるかの如く、南が丘中学校の敷地は殆ど崩壊。もうトドメに入るしかない。

優斗「いつけえ、メタルグレイモン！！」

メタルグレイモン「ギガデストロイヤー！！」

ジュレイモン「きしゃあああああ！！」

メタルグレイモンの左胸から放たれたギガデストロイヤーは真っ直ぐジュレイモンに当たろうとした。が、寸前でジュレイモンの樹の蔓によって防がれてしまった。

続けてワーガルルモンがジュレイモンの背後に忍び寄り、必殺技をぶつける。

ワーガルルモン「カイザーネイル!!」

怒涛の三連がジュレイモンの背中に傷をつけた。

あと一息。そう思った瞬間ジュレイモンは口から高濃度の霧が発生し周囲を攪乱させた。

勿論優斗達にも何も見えてない事は確かだ。そしてその霧が晴れると、ジュレイモンの姿が消えていた。

戦闘が終わってか、メタルグレイモンとワーガルルモンは退化し、デジソウルを大幅に使用したせいか、コロモンとツノモンにまで退化してしまった。

続く

二話（後書き）

次回

三人目

三話（前書き）

デュークモン「前書き劇場」

麗子「ナニテンノアント」

デュークモン「今回のタイマーは、何とロイヤルナイツを二体パートナーにした人物だ」

麗子「そして意外にも優斗君の知り合いよ」

デュークモン「前は完全体になるもジュレイモンはデジタマにはならなかった」

麗子「てなわけで、本編スタート！」

三話

アグモンとガブモンがコロモンとツノモンに退化してしまい、数日が過ぎた。

あれからジュレイモンは姿現さず、”PSLD”が今現在総力を挙げて捜索中の事。大方デジタルワールドにでも逃げ込んでいるに違いない。デュークモンも頭を抱えている。

デュークモン「ジュレイモンは未だに見つからない。……それにしても、すぐに完全体になれるのは……彼等のデジソウルは並では無いのだろうか……」

麗子「デュークモン。三人目のタイマーが見付かったわ。ちよつとデュークモン？」

デュークモン「聞いている。……で、誰なんだ？三人目は」

悩みながら麗子の話が聞こえる事が出来るとは、流石ロイヤルナイツと言っべきか。

麗子は手元の資料をデュークモンに手渡して、近くの椅子に着席する。彼女もデュークモンと同じく頭を抱え込む。理由は勿論デュークモンと同じ。ため息を付きながらコーヒーを口に運ぶも、それは解決にはならない。

デュークモンはそんな麗子から目を背け、手渡された資料を読む。

デュークモン「……これは……ははっ…デジモンキングの差し金とは……粹な事をしなさる。……デジヴァイスタ입は、D-3……か」

優斗は何時もより遅く起きた。今日は休日。何もすることは無いので、ゆっくりしたいのだが、コロモンが前夜に深夜ヒーロー映画に燃えてしまい、今優斗の目のしたには隈がつつすらと出ていた。

コロモン「兄貴ー！詔が朝ごはん食べろってさー！ああ、卵焼き美味かった…」

優斗「あー、わかった。わかったから、俺の腹の上で跳ねるな。夕べ食ったつくねが戻りそうだ………」

コロモンを頭の上にのつけたまま、着替え階段を下りる。朝飯は多分コロモンが言ってた卵焼きがおかずだろう。

一階に降りると、リビングの方がいつもより賑やかに聞こえてきた。三人の人間が喋っているようだが、誰か来ているのだろうと軽く思い、リビングのドアを開く。

優斗「あよ………」

ナナ「あ、優斗おはよー！」

ドンガラガッシャーン！

波奈「ん、にーにー遅いよ起きるの」

詔「あらおかしいわね、そこ何も無いのに滑っちゃうなんて」

優斗「いやいやいやいやー！！ナナ、なんで人ん家で何気なく朝飯頂

戴してんだよ！波奈は少しはナナが居ることに何も問題は感じないのか？！んでもっておかん平常過ぎるわ、滑ってもねえし、ずっこけたんだよ！！」

ツノモン「……………ふっ」

優斗「ちよっ、何人を鼻で笑うかなお前は！！」

四人（内一匹）に朝一番の突っ込みを行ったせい、ある意味最悪の目覚めをしたようだ。

ナナがここに来たのは、実は優斗に用があつての事。何かと思う優斗はちゃちゃっと朝飯を食べ終えコロモンとツノモンを波奈に任せ、ナナを自室に連れていく。それを見た波奈はしたり顔だ。

優斗「……………はぁ。何しに来たんだ？こんな朝っぱらから」

ナナ「うん。実はね、これの事で来たんだけど…」

ナナは自分のデジヴァイスを優斗に差し出し、じっくり見てくれと言わんばかりの目で優斗を見る。先日見たのと変わらないミラージュブルーカラーだ。

優斗「デジヴァイスが、どうかしたんだ？」

ナナ「実はね、レンタルビデオ屋さんでセイバース全巻借りて見たんだけど……………」

彼女は次の様に述べた。自分のデジヴァイスと同じタイプを持つ登場人物のパートナーデジモンと自分のパートナーデジモンが違う事と優斗のパートナーデジモンのアグモンの進化が違う事だ。

やはりナナも違和感を感じていたらしい。

優斗「しかし、よくまあ全巻見れたな。敬服するよ」

ナナ「えへへ…。あ、でもジュレイモンはどこにいるんだろうね？」

優斗「さあな……っ……！」

ナナ「どうしたの？」

優斗「なんで忘れてたのかな、俺は」

優斗は言うつと、本棚に向かい扉を開け、中から幾つかデジモン関連の雑誌や専門誌だけを抜き取り、幾つかの本を開き、答えを見付けた。

そこに書かれてあったのは、ロイヤルナイツの一員・オメガモンについてだ。

答えを見付けた優斗は「やっぱりそうだったか…」と呟き、ナナに言った。

優斗「謎がわかった。ガブモンとアグモンについてが」

ナナ「え、どういうこと？」

優斗「まず見てくれナナ。ここに書かれているのは、デュークモンと同じロイヤルナイツの一員のオメガモンだ。その証拠のイラストもあるだろ？」

ナナ「それって……これのこと？」

優斗にオメガモンのイラストを見させられたナナはそれに指差した。

優斗「ああ。オメガモンはジョグレス進化と言って、特定のデジモンを融合することで進化するデジモン。それに必要な素材は、アグモンが最終進化したウォーグレイモンとガブモンの最終進化のメタルガルルモンの二体だ。俺達のデジヴァイスは多分、無印のティマ―の子供達が使っていたタイプより性能がいいから……だと思う」

ナナ「そんな事が……」

優斗「因みに、オメガモンは劇場版のデジモンの三作品出てる。初登場は【ぼくらのウォーゲーム】次に出たのが【ディアボロモンの逆襲】そして、サブタイは忘れたが、【デジモンティマーズ】の劇場版だ」

ナナ「そういえば、セイバースにも出てた様な……」

つまり、優斗とナナはオメガモン自身が選び、自らのジョグレスを解除することでアグモンとガブモンまでに退化。そして恐らく記憶を消して置き、デジヴァイスバーストと共に現れた。というのが優斗の仮説だ。

優斗「だが、現実アグモンとガブモン……いや、今はコロモンとツノモンか。その二体が信頼を得ないと、俺達は……なんでティマーになったのか、分かりやしない」

優斗は壁に拳をぶつけ、頭を抱えた。

その時、優斗とナナのデジヴァイスから着信メロディーが鳴る。長官からだ。

聡獣郎<ワシが”PSLD”の長官の東聡獣郎である！！南が丘埠頭にてハンギョモンとホエーモンが出現！！現在周囲の建造物を破壊している模様。タイマーは直ちに急行！！>

優斗「つたく！行くぞ、ナナ」

ナナ「うん！」

二人はコロモンとツノモンを抱え、”PSLD”支給のバイクに跨がり、南が丘埠頭へと向かう。

千代里「ちょ、まだ意味わかんないんだけど！！！」

たまたま埠頭近くの京浜公園に訪れていた千代里はホエーモンとハンギョモンに目を付けられ、何もした訳では無いのに追い掛けられている始末。

更に、逃げている最中右手に白いボディに青いグリップが特徴的で黒く短いアンテナと液晶画面のアイテムが出現した。これが何の役に立つのか分からない。だけでも、逃げなければ死ぬ。それが千代里の頭の中にあつた。

「ベビーバーナー！！！」

「ビーストアタック！！！」

振り返ると、先を走っていたハンギョモンに赤い炎と爪の斬撃が当

たった。

一体何が起こったのか千代里は分からず、目を白黒させていた。

千代里「何、……何がどうなって……」

優斗「千代里……?」

千代里「え、うつそ優斗?! まぢで?」

ナナ「あーっと……優斗、この子誰?」

優斗「ああ、ナナには言ってなかったな。同じクラスの飯田千代里、以上。さてと、行くぞアグモン!」

ナナ「行くよ、ガブちゃん!」

<<DIGISEOUL CHARGE>>

優斗& amp・ナナ「デジソウル、チャージ!!」

アグモン「アグモン進化!」

ガブモン「ガブモン進化!」

グレイモン「グレイモン!!」

ガルルモン「ガルルモン!!」

グレイモンとガルルモンがハンギョモンとホエーモンを相手にしている時、優斗は千代里の手元に気が付いた。それは、恐らく自分と

同じティマーの証。

優斗「まさか……千代里が三人目のティマー……!?!」

千代里「え、なにそれ?」

ナナ「ティマーは、デジモンと共に戦う戦士の事よ。そのデジヴァイスが何よりの証拠」

千代里は右手に収まっているデジヴァイス…D-3を強く握り締める。

すると、上空から光が降り注ぎ、二つの柱を形成する。光が止むとそこにはブイモンが二匹いた。その内の一匹は額に十字の傷が目立つ。

ブイモン「お前が僕のティマーなの?」

ブイラ「よろしく頼むぜ」

ブイモンと十字の傷があるブイラは千代里にそういうと、千代里は覚悟を決めたのか、コクリと肯定する。
そしてD-3を高く掲げ叫ぶ。

千代里「デジメンタル、アー……ッブ……!」

ブイモン「ブイモン、アー……進化……!」

ブイモンと奇跡のデジメンタルが一つに重なり、アー……進化を遂げる。

そして、光が止むとそこにはロイヤルナイツの一員・マグナモンがいた。

マグナモン「輝きの奇跡！マグナモン！！」

千代里「デジソウルチャージ！！」

バイラ「バイモンワープ進化！」

続けてバイラが青白く光りだし、一気に究極体にワープ進化した。

アルフォースブイドラモン「アルフォースブイドラモン！！」

またもロイヤルナイツの一員・アルフォースブイドラモンが現れる。そしてここに、新たなタイマーが現れ、二体のロイヤルナイツが現れた。

さすがロイヤルナイツというべきか、パンチとキックだけでホエーモンとハンギョモンを翻弄させる。しかもスピードも馬鹿にならず、圧倒的な素早さでこれまたホエーモンとハンギョモンを翻弄させる。

ホエーモン「ぐう、強すぎなんだな！さすがロイヤルナイツなんだな！」

ハンギョモン「だからってえええ！！」

しかし、ホエーモンとハンギョモンはアルフォースブイドラモンとマグナモンに攻撃は届かず、グレイモンとガルルモンにトドメを刺されてしまう。

グレイモン「メガフレイム！！」

ガルルモン「フリーズファンゲ！！」

デジタマと化したホエーモンとハンギョモンを見送った後、千代里はD-3にブイラとブイモンをセーブし、”PSLD”に召集され正式に入隊することとなった。

入隊手続きを済ませた千代里はナナを連れ、喫茶ルームへと向かった。

ナナ「あの一、一体どうしたんですか？」

千代里「あんたまぢやるよねー」

ナナ「？」

千代里「まさか、優斗に女が居たとは……」

ナナ「ごっご、誤解です！！ただの幼なじみですから！」

千代里「いや、いーよいーよ。そんな否定しなくてもさー」

ナナ「あー、でも千代里さんて…優斗の何なんですか？」

やや怒気が籠ったナナは千代里に優斗と何の関係があるのかと問い出した。

千代里はその視線に負け、自分と優斗との関係を述べた。

千代里「関係も何も、ただのクラスメイトよ。いやまぢで」

ナナ「——ならいいんですけどね」

と言うと、ナナは席を外しその場を去った。千代里は手元のD - 3を見つめ、カフェラテを飲み干した。

千代里「これからも、よろしくね」

続く

三話（後書き）

次回

特訓

四話（前書き）

千代里「ちよりっす！」

ブイモン「前書き劇場だよ！」

ブイラ「前回、姐御は晴れてティマーになったんだぜ！」

ブイモン「まさかロイヤルナイツが勢揃いってオチは無いよね、この小説」

ブイラ「ってなわけで、今回はブイモンが大活躍（？）でX抗体が登場」

ブイモン「まさかのカオスモンフラグもあるよ」

千代里「あー、もーしもーし里菜！……えッ、今日カラオケ？！行く行くー！！あ？期末？んなもんほっとけばいいよー」

ブイモン & a m p ; ブイラ「あんまり姐御頼りにならないような気がする」

四話

今優斗はアグモンとナナとガブモンと共に、とある山の中にある寺に来て座禅を組んでいた。

この寺は実は、“PSLD”の施設の一つであるため、監督なのか、デュークモンも居た。そして彼も座禅を組んでいた。

因みに、寺の名は『善念寺』と言い、東長官の双子の弟の東忍にんじゅろう従郎兄の聡獣郎と同じ顔なのだが中身は違い穏やかな性格である。因みに彼もテイマーであり、パートナーデジモンはダークドラモンだ。

ダークドラモン「空即是色、色即是空。無の境地は如何なるものであるか、身を持って知るがいい」

しかし、かれこれ3時間。3時間も同じ事を言っておるので有難迷惑な事だ。

因みに、終わって初めてアグモンは組みながら眠っていたのだ。その後は滝行。ユウトとナナには修行僧の服を身につけながらの滝行だ。

季節はそろそろ秋の半ば、身に滴る水は冷たいを通り越している。なので……

アグモン「冷たいよぉ……寒いよぉ……お腹すいたよぉ……」

真っ先にアグモンがリタイアしてしまう。そんなアグモンを滝壺からダークドラモンは陸地に座らせ、右腕を高く振り上げた。

ダークドラモン「かあああつー!」

アグモン「いでっ!」

ダークドラモン「ふうむ。アグモンよ、君にはティマーと同じく、特別な修行メニューを提案しよう。強制はしないが？八神君はどうかな？」

アグモン「兄貴いゝ…」

優斗「あー、その前に休憩いいですか？」

デュークモン「確かに、今のアグモンはボドボド…じゃなかった。ボロボロだからな」

ガブモン「僕はどっちでも良いよ。そんなに疲れても無いし。お嬢様は？」

ナナ「私は優斗と同じで良いかな」

ダークドラモン「…仕方が無い。和尚、良いでしょう？」

忍従郎「ああ良いだろうな。精進料理の支度をしてからだかな」

つまりは飯の用意をしてからにしろという事だ。

一応優斗とナナは炊事は出来る方だが、アグモンがつまみ食いしそうで色々と苦労しそうだ。その辺はデュークモンとガブモンが止めてくれるだろうと優斗は思い、ナナと共に調理場へ向かった。自分のティマーが行ったのを確認したデュークモンはガブモンとアグモンに向かって語りだした。

デュークモン「お前達は、現実世界に来る前の記憶は、あるのか？」

言われた二匹は、そういえばと思ひ息を呑んだ。

どちらも気が付いたら自分のテイマーの目の前に現れたのだから。

デュークモンはこの二人の記憶が無いことを悟り、「いや、何でもなし」とだけ言い頭を垂れる。

デュークモン「（我が君イグドラシルよ。あなたは残酷な事をなさるよりによって、盟友オメガモンの記憶を消してから成長期のまま送るなど……………」

デュークモンは涙を流し、かつて盟友でもあり親友でもあったオメガモンの事を思い出し、同時にイグドラシルへの怒りを表し、嗚咽を漏らす。

アグモン「……………なあ、デュークモン」

涙を流すデュークモンを気遣ってか、アグモンは笑顔で言った。

アグモン「オレな、前にデュークモンに会った気がするんだ。ガブモンもそうだろう？」

ガブモン「そういえば、そうだね。僕もデュークモンとは、友達だった様な気がするんだ。このトカゲはノーカンだけど」

アグモン「てめっ、トカゲ言うな犬！」

ガブモン「っ！犬言うなトカゲ！」

アグモン「犬犬犬！」

アグモン「トカゲトカゲトカゲ！」

口喧嘩に発展してしまった二体を見たデュークモンは思わず失笑。これがあのオメガモンとは到底思えなかった。だけど、いつかこの二体はいつか、オメガモンへと進化することだろう。

日は既に傾きかけた昼下がりだ。そんな時間帯に、千代里が私服のままデュークモンの前に現れた。どうやら見学らしい。

デュークモン「千代里？何しに来たんだ？」

足元で取っ組み合いの喧嘩をしているアグモンとガブモンを無視して、千代里とデュークモンは話を続ける。

千代里はD-3からブイラとブイモンをリロードし、デュークモンに応えた。

千代里「ちょりーっす！」

デュークモン「ちょり？そのちょりとは何だ？」

千代里「いーからいーから。優斗とナナが修行してるって聞いているんだけど、二人は？」

デュークモン「そろそろ食事の時間だ。二人は今台所に立っているだろう」

ブイラ「なーなー姐御、おれ腹減った」

ブイモン「ぼくもー！」

アグモンとガブモンと遊んでいたブイラとブイモンは空腹を千代里に訴えた。そろそろ食事の時間。成長期のデジモンも普通の子供と

変わらない。

千代里「そろそろ帰る？」

デュークモン「何だ？帰るのか？」

千代里「もちつと居たいけど、この二人が腹すかせるとまぢ疲れっから」

デュークモン「そうだな（まさかマグナモンもアルフォースブイドラモンも退化して現れるとは……）気をつけて帰れ」

千代里「はいはい。行くよ、ブイモン、ブイラ」

千代里はブイラとブイモンを引き連れ寺を去った。

どれ程歩いただろうか。彼女は一つ違和感を抱き、振り返った。しかしそこには何も有らず。またいくらか歩いた場所で、千代里はブイラをD-3に戻した。

ブイモンはファイティングポーズを取り、何処からか流れる殺気を読み取る。

千代里「出て来なよ。この千代里は、何処にもにげねーよ」

それを聞いたのか、上空からヴァーミリモンが落下。目を赤黒く光らせ、威嚇の咆哮を上げた。

ヴァーミリモン「ガアアアアア！！」

千代里「でっかいトカゲだなあ」

ブイモン「あ、姐御あいつの右足を見て！」

ブイモンがヴァーミリモンの右足を指差す。そこには黒く鈍く光るリングが巻かれていた。それがなんなのか千代里は知らず、D-3を高く掲げ叫んだ。

千代里「デジメンタル、アーリーアップ！」

D-3から流れる光とデジコードがブイモンを照らし、アーマー進化させた。

ブイモン「ブイモン、アーマー進化！」

奇跡のデジメンタルがブイモンと一体化。デジメンタルはクロンデジゾイドの鎧に変わり、ロイヤルナイツのマグナモンが現れる。

マグナモン「輝きの奇跡！マグナモン！！イーヴィルリングがまたも出るなんてね、ぶっ潰してからヴァーミリモンは保護だ！」

マグナモンが言うと、千代里のD-3に通信が入った。長官の東聡獣郎からだ。

聡獣郎<ワシが”PSLD”の長官の東聡獣郎である！飯田千代里はイーヴィルリングを破壊後ヴァーミリモンを保護。八神優斗と武之内ナナはジュレイモンを打ち負かせ>

こことは別に、優斗達の方にもデジモンが現れたらしい。

長官のメッセージを聞いた千代里はD-3を構え、指示を出した。

千代里「マグナモン、イーヴィルなんとかを壊しちゃって！」

マグナモン「了解した！マグナムキック！」

マグナモンのキックがヴァーミリモンの頭を直撃。受けたヴァーミリモンは怒って御自慢の角で仕返しとばかりに突き立てる。しかし、マグナモンはそれを華麗に避けてからの踵落しを応酬する。

ヴァーミリモン「ヴァームブレイズ！！」

マグナモン「効かん！」

いくら完全体のヴァーミリモンでもロイヤルナイツの一員の体に傷を付ける事は出来ない。

対するマグナモンは成熟期と同程度の力を持たないアーマー体的一种だが、マグナモンは究極体に匹敵する戦闘力を持っており、クロンデジゾイドの鎧は防御力もあってか、ロイヤルナイツの守りの要とも言われる。

マグナモン「これで、トドメだ。はああああ！」

マグナムパンチがヴァーミリモンのイーヴィルリングに直撃。イーヴィルリングにヒビが走り、粉のように崩れた。

直後、ヴァーミリモンは気を失うかのように倒れてしまった。さすが千代里はヴァーミリモンに向けてD-3を掲げる。すると、ヴァーミリモンはデジコードに変換され静かにD-3に収納された。マグナモンはバイモンまで退化し、千代里に言った。

バイモン「姐御、飯飯！」

千代里「じゃ、帰っかー」

千代里は言っと、ブイモンをD-3に戻し、その場を去った。

千代里がデュークモンと別れたその頃、優斗とナナはアグモンとガブモンとともに食事を取っていた。もう日は少し傾き始めているので、遅めの昼食となった。

メニューは至って質素な精進料理。主に胡麻を使用した献立で、体の体調を考えてある。

ダークドラモン「これが終わったら、地獄の三丁目だ。覚悟しろよ」

優斗「ハイ（それを言うなら、地獄の一丁目じゃないのか）」

食べ終えて、片付けようとしたその時、寺の外から樹木が生い茂るような音が聞こえた。しかしそれは異常過ぎた。

ダークドラモンは襖を開け、その正体を見付けた。

それは、その幹にイーヴィルリングを装着したジュレイモンだったのだ。ジュレイモンは周囲から蔭を生やし、善念寺に向かって来るその時だ。デジヴァイスバーストに通信が入った。長官からだ。

聡獣郎<ワシが”PSLD”の長官の東聡獣郎である！飯田千代里はイーヴィルリングを破壊後ヴァーミリモンを保護。八神優斗と武之内ナナはジュレイモンを打ち負かせ>

優斗「千代里のところにもデジモンが……？……まあいつか。行くぞ、アグモン！」

ナナ「行くよ、ガブちゃん！」

<<DIGISEOUL CHARGE>>

優斗& amp・ナナ「デジソウル、チャージ！」

アグモン「アグモン進化！」

ガブモン「ガブモン進化！」

グレイモン「グレイモン！」

ガルルモン「ガルルモン！」

ジュレイモン「があああ！」

ジュレイモンは薦で猛攻するが、グレイモンとガブモンは軽く避けた。修行の成果が出たことが、よくわかる。

グレイモンのパワーとガルルモンのスピードが以前ジュレイモンと戦った時より段違いになっていた。

しかし、イーヴィルリングを装着しているせいか、ジュレイモンも以前より確かに強くなっていた。薦の猛攻も以前の二倍はあった。

グレイモン「ぐああ！」

ガルルモン「ぐっ！」

優斗「グレイモン！」

ナナ「ガルちゃん！」

ジュレイモンからダメージを受けたグレイモンとガルルモンは地に伏せてしまう。その時、優斗のデジヴァイスに進化のコードが記されてあった。優斗は迷うことなく、それを起動した。

< X EVOLUTION >

優斗「グレイモン、ゼボリューション!!」

グレイモン「グレイモン、X進化!!」

X進化するグレイモンの四肢はより本物のティラノサウルスに近付き、姿形も向上し、角も鋭くなっていた。

グレイモンX「グレイモンX!!」

X抗体として進化したグレイモンXは完全体でしかもイーヴィルリングで凶暴化したジュレイモンと互角に戦っていた。

一直線な突進もX進化以前よりも強力に、尾でたたき付け多大なダメージをジュレイモンに当てた。

そしてグレイモンXの顎がジュレイモンの幹に食らい付く。食らい付いて離さない。

優斗「良いぞグレイモン!これで、トドメだ!」

掲げたデジヴァイスバーストからバーコード状のデジコードがグレイモンXの体に吸収され、グレイモンXの口には巨大な火球が出来ていた。

グレイモンX「メガバースト!!!」

吐き出された業火はジュレイモンを包み、イーヴィルリングを破壊。ジュレイモンはデジタマに戻り、何処か遠くへ飛び去った。

一気にグレイモンXはアグモンに退化。優斗はどっと疲れたように膝を着いた。心配したのか、ナナが優斗に駆け寄った。

ナナ「優斗、大丈夫?!」

優斗「あー、大丈夫だ。心配すんな」

無理して立つ優斗だが、それでも上手く立てない。ナナの肩を借りる事でやっと立つことが出来き、対するアグモンは疲労の色も見せず、のびのびとしていた。

それを見てか、ガブモンは一匹優斗とアグモンを見て、微かに焦りを抱いていた。

ガブモン「……………あんなトカゲに出来て僕に出来ない訳が無い!」

続く

四話（後書き）

次回

デジタルワールド

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0598x/>

デジタルモンスターズ ～選ばれし戦士達 GENERATION～

2011年11月12日14時58分発行